

家路の途中、吉野さんに告白された。

学校一綺麗なのに、雰囲気が決定的に周囲を拒絶する吉野さんは

“無愛想な美人”

それが万人の印象だ。

そんな彼女が僕なぞに話し掛けた事が凄く驚きだった。

「食事は生体^{わたしたち}の最も単純^{シンプル}な工程^{メカニズム}なの。

どの下等^{ケモノ}な生物にも具^{そな}わる。

他^{ゆうきたい}者を咀嚼し蠕動し分解し吸収し血肉にする…判る？」

何時もの無表情で唐突に彼女は話し掛けてきた。

半分も理解不能だったけど、曖昧に肯く。

「血肉って単なる栄養じゃないわ…全てよ。

記憶も、遺伝子^{ゲノム}も…全て。

好きな物を喰えば、一緒になれるの。

それって凄く素敵ね？一緒だもの。

憎悪^{にくしみ}も離反^{うらざり}も悲哀^{かなしみ}も無いわ。ずっと一緒だもの。でね」

一旦言葉を切って俯いて

「私は…君が好き。君は…私が、好き？」訊いた。

麻痺した思考。僕は…再び首肯する。

そう…良かった。

呟いた彼女は一、二歩擦り寄って

僕を仰視して。

いただきます。

…其れは

僕が見た最初で最後の

彼女の破顔^{えがお}で

彼女の長い犬歯^{きば}が

斜陽^{ゆうひ}に

煌^{きらめ}

い

て

暗転。